

IX-1 城柵

城柵 『日本書紀』大化3(647)年の淳足柵の設置を初見として、『三代実録』仁和3(887)年の最上大山郷への出羽国府の移転不認可記事に至るまで、城柵に関する記事が散見する。

城柵は蝦夷支配を目的として、越後・出羽・陸奥国北半の辺境国に設置された軍事・行政機関である。辺境国の国司には、通常の任務に加えて「饗給、斥候、征討」の任務があり、国郡制と城司制の二本立てで行政が執行されている。城柵とは国府をも包括した蝦夷支配の国家施設という普通名詞として理解でき、このことは陸奥国府多賀城が天平五柵(色麻、玉造、新田、牡鹿柵)の中で多賀柵と記されていることからわかる。秋田高清水岡の出羽柵が阿支太城に、多賀柵が多賀城へと呼称を変え、雄勝城・桃生城に柵と城の混用がみられるのは、天平宝字年間である。城から柵への変化は当時の唐風好みの呼称変更とみてよい。

変遷の段階 城柵は立地およびその構造と内容の変遷から3段階に区分して理解できる。

第1段階は『日本書紀』に登場する淳足・磐舟・都岐沙羅柵で代表される7世紀中頃から8世紀初頭の城柵である。信濃・阿賀野川河口の沖積地に立地するとされるが、遺跡は確定していない。一方、表日本では城柵に関する記事がないものの、この期の城柵遺跡が調査されている。広瀬川河口の低位河岸段丘上にある宮城県仙台市郡山遺跡や浜堤上に立地する宮城県赤井遺跡(牡鹿柵・牡鹿評家と推定)がそれである。

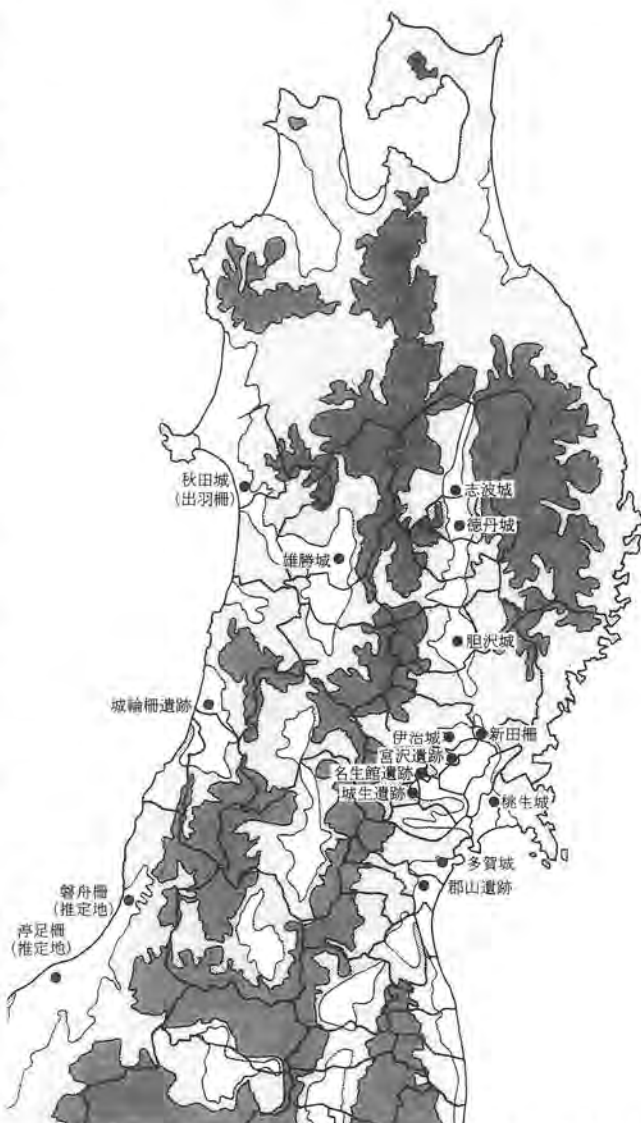
仙台市郡山遺跡は掘立柱建物で構成され、基準線から真北に30度振れるⅠ期官衙と真北方向のⅡ期官衙に大別され、それぞれに数小期の変遷がある(図2)。

Ⅰ期官衙は材木列塀で区画された方形の院が連結して東西300m×南北600mの官衙全体を構成する。中枢部の院は90m×120mで、建物群は塀に連結し、周囲に総柱建物群が付属する。「名取」のヘラ書き土器の存在から名取評家か名取柵とみられている。なお、院が連結して官衙全体を構成する在り方は赤井遺跡でもみられる。

Ⅱ期官衙は428m=4町四方の材木列塀とその外の大溝で区画された「単郭」構造の城柵である。この構造が「重郭」構造をとる8世紀以降の城柵との大きな違いである。郭の南正面に八脚門、中央北寄りに6間×3間の四面廂付建物の正殿、正殿の北東後方に石敷広場と入水溝・出水溝を完備した石組池、正殿前面に2~3棟の東西建物、さらに、その前方に倭風建物を含む東・西各4棟の建物を対称に配置する。特に、石敷広場と石組池は飛鳥の地で蝦夷を

饗宴した石神遺跡の例に似る。方4町の単郭それ自体が蝦夷への饗給・儀式という城柵の目的を最もシンプルな形で表した城柵政庁とみられる。南1町には政庁に付属する数棟の建物があり、南西には方2町の寺院が伴う。このⅡ期官衙を多賀城以前の国府とみる説もあるが、平城遷都以前の国府については全国的にもまだわかっていない。

第2段階は8世紀に建設された城柵である。立地上の特



越後	越後	越後	越後	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	陸奥	越後	越後	越後
淳足柵	磐舟柵	都岐沙羅柵	出羽柵	多賀柵	杜鹿柵	新田柵	玉造柵	桃生城(柵)	小(雄)勝城	伊治城	覺賀城	多賀城	秋田城	由利柵	胆沢城
六四七(大化三年)	六四八(大化四年)	六五八(養明四年)	七〇九(和銅二年)	七三七(天平九年)	七三七(天平九年)	七三七(天平九年)	七三七(天平九年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七六七(神護景雲元年)	七八〇(宝龜元年)	七八〇(宝龜元年)	七八〇(宝龜元年)	七八〇(宝龜元年)	八〇二(延暦二年)
(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)	(日本書紀)

図1 古代東北の城柵

徴は比高30～50mの低丘陵を取り込んで築造されることである。前段階との構造上の変化は、築地などで区画した政庁域を取り囲む形で実務を司る曹司群を置き、これをも築地等の明確な施設で区画し、政庁域と曹司域からなる「重郭構造」の官衙域を形成する点である。曹司域の成立に起因したこの重郭構造は陸奥国府多賀城の成立を画期としている。

8世紀後半の桃生城、此治城、小勝城（払田柵跡）など一部に三重構造がみられるが、政庁域と曹司域からなる城柵特有の形態は終焉を迎える10世紀中頃まで一貫して続く。このことは多賀城の建設を契機に、城柵は蝦夷への饗給を主目的とした単郭構造の段階から、これに実務行政の役割が加わったことを意味する。

第3段階は9世紀初頭を契機とする城柵の内容充実という大きな変換である。具体的には政庁建物配置の変化、曹司建物の定型化と充実、官衙域周囲での方格地割の成立と展開という事象にあらわれる。

なお、2003年度が多賀城の調査で外郭南門から1町政庁寄りの位置にあたる南面道路上で掘立柱八脚門が検出されている。政庁中軸線上の門としては多賀城から移った鎮守府胆沢城の政庁前門（殿門）があるだけであり、鎮守府に係わる問題として検討すべき課題となっている。以下、政庁、曹司、官衙周辺域の順に変遷と特徴について解説する。

政庁の変遷 8世紀前半の政庁として多賀城Ⅰ期政庁と秋田城Ⅰ期政庁が調査されている（図3）。

多賀城Ⅰ期政庁は720年頃から造営を開始し、724年頃にはほぼ完成したとみている。建物は瓦葺きの掘立柱式である。中央北寄りに5間×3間南片廂の正殿、その東西前面に対称に配置した東・西脇殿は7間×2間の北2間に間仕切のある床張り建物で、正殿正面に広場、南辺築地正面に八脚門の南門を配置する。南門外にも対称に、朝集殿の機能を持つ東・西南門前殿がある。桁行の短い（5～7間）脇殿や南門前殿は他地方の国府では見られない東北城柵固有の特徴である。Ⅰ期の配置は多賀城各期（Ⅱ～Ⅳ期）およびすべての東北城柵政庁にみられる基本的な要素であり、城柵政庁のモデルになっている。

多賀城Ⅰ期政庁と同配置の政庁に、払田柵跡Ⅰ期（8世紀末）、城輪柵跡（出羽国井口国府推定地）がある。

秋田城跡Ⅰ期政庁の規模は東西94m×南北77mで、城柵政庁では唯一の横長プランである。瓦葺きの築地で区画され、多賀城Ⅰ期と同構造の5間×3間の南片廂正殿、3間×1間の前殿、6間×2間の北東建物が検出されている。横長プランは地形の制約からである。正殿に多賀城政庁との共通性がみられるが、前殿の存在（伯耆、三河、下野国府）や北東建物の出現時期など他の国府からの影響も指摘

できる。この時期に前殿と正殿北方の建物が存在するのは、秋田城政庁と此治城政庁だけである。

8世紀後半の城柵政庁としては760年築造の桃生城、小勝城、760年修造の多賀城政庁Ⅱ期、秋田城政庁Ⅱ期がある。仲麻呂の四子である朝獵が按察使兼陸奥国守として天平宝字年間に東北一円支配強化のもとに修造、造営したものである。また、767年築造の此治城政庁がある。

このうち、国府多賀城Ⅱ期政庁だけが特異な配置が採用される。建物はすべて礎石立ちで再建され、広場も石敷きに改められる。南門の左右に6間×2間の翼廊、東・西脇殿も東・西築地に、北築地中央に桁行54mの北殿が取付くなど意識的に四至の築地線が飾られる。また、正殿の背後には近江国府政庁や伊勢国府政庁にみられるような梁行の広い後殿（4間×4間の総柱建物）が新設される。

これらの国府はいずれも天平宝字年間頃の成立とみられている。陸奥国守は朝獵、近江国守は仲麻呂自身の兼任、伊勢国守は仲麻呂と親交の深い石川名足、藤原小黒麻呂らが任官されており、仲麻呂と関係が深い一族の任官国府に限って認められる点が注目される。

築地に取り付く桁行の長い北殿は8世紀後半の下野国府Ⅱ期に、8世紀末（多賀城Ⅲ期）の脇殿北に配置する東・西楼についてもほぼ同時期の伯耆国庁にみられるので、多賀城政庁Ⅱ期以降の建物配置の変化は他の国府の同時期の類例から説明できる。また、桃生城では、多賀城以前に後殿が成立しており、5×2間の床張りの東・西脇殿の内庭側中央3間に縁が付く。この特徴は志波城、その移転先の徳丹城政庁、城輪柵Ⅰ期西脇殿に受け継がれている。

第3段階の9世紀初頭以降に設置された城柵政庁として、陸奥国では多賀城（Ⅲ・Ⅳ期）、胆沢城（802年）・志波城（803年）、徳丹城（814年初見）の政庁が、出羽国では城輪柵、八森遺跡（仁和期の出羽国府）、払田柵遺跡、秋田城Ⅲ～Ⅴ期の政庁がある。払田柵遺跡外柵Ⅰ期の柵木の年輪年代が801年伐採で「小勝」の墨書土器が数点存在することから、9世紀の小勝城とみられている。

この段階での特徴は正殿の後方東西に掘立柱建物が出現し、正殿後方の使われ方に変化がみられることである。北西の建物群については、胆沢城跡の木簡などから戊亥（北西）を祭る内神に関する建物とする説がある。

また、徳丹城の調査では、志波城からの移転過程が明らかになってきた。徳丹城は方355.8m=1,200尺であるが、外郭東辺築地と重複しこれより古い一辺150mの大溝で区画した不正方形の一郭が検出されている。区画内には廂付建物を中心に2時期の変遷がみとめられ、機能していたことがわかる。区画に近接する東方の北上川から引いた運河の遺構も発見されている。調査者はこの一郭を造営等官衙

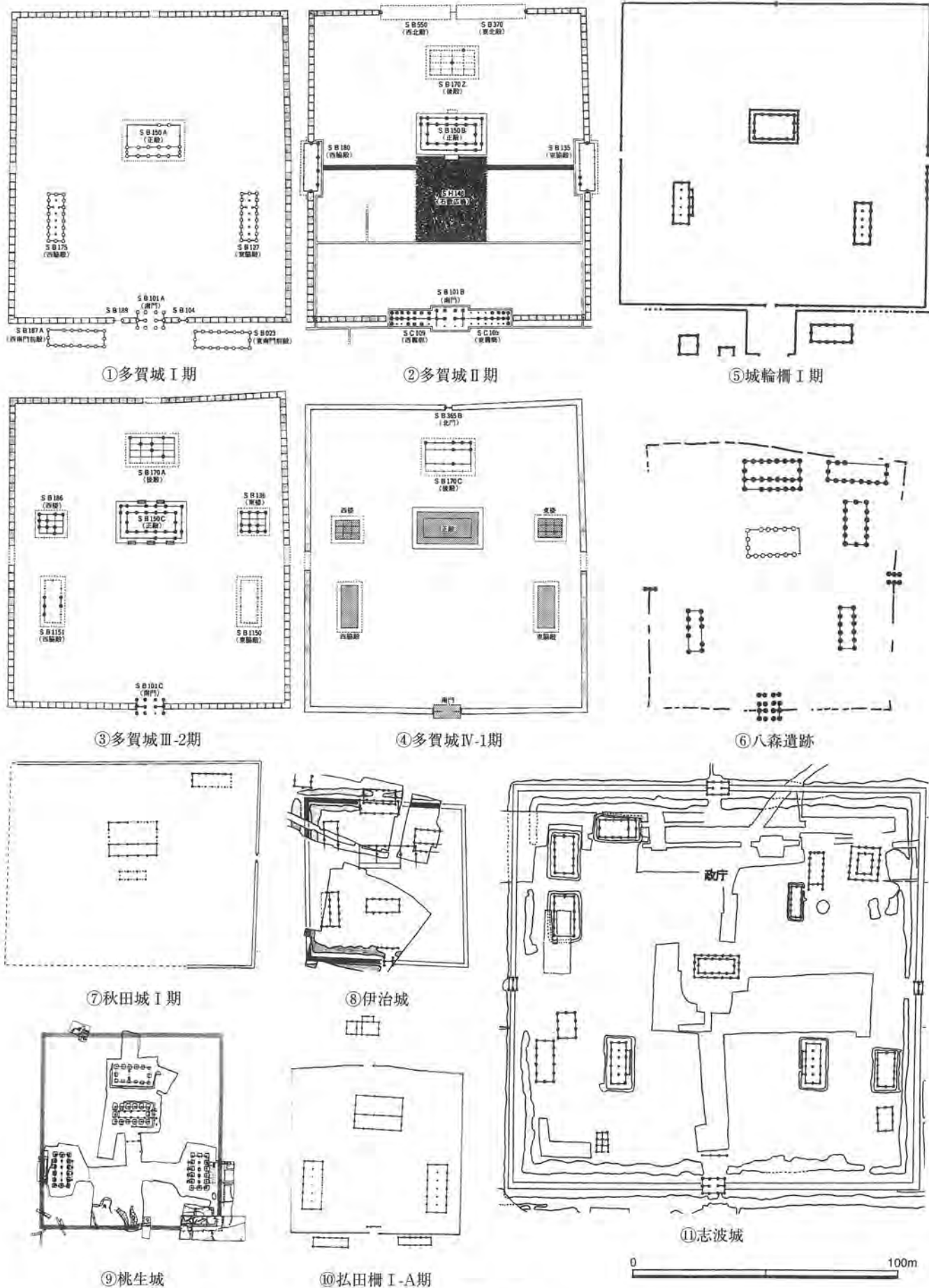


図3 城柵の政庁

と位置付けている。

陸奥・出羽の結節点に営まれた城柵である志波城政庁は方150mを築地で囲い、国府政庁を凌ぐ規模をもつ(図7)。建物配置も脇殿の前方や正殿北方にも四面廂建物を配置するなど特異である。曹司建物は希薄で、政庁南前面に展開するにすぎない。この現象は第1段階の郡山Ⅱ期官衙のあり方に極めて似る。最北端の城柵として蝦夷への饗給を主目的とした城柵とみたい。移転した徳丹城の曹司は方355.8m全体を使って濃密に展開しており、弘仁14(823)年段階で実務中心の施設へ転換したことを物語っている。

曹司 8世紀の曹司については資料が少ない。秋田城は断片的な資料であり、多賀城の場合でも8世紀前半と後半の変化を知ることは難しい。大畑地区、作貫地区、城前地区で8世紀の掘立柱建物がわずかに発見されている。

城前地区では8世紀後半に中央列に廂付東西棟建物を縦に配置し、これを目隠し堀で3ブロックに区分し、その東には南北棟の切妻の建物を直列に配置している。大畑地区では4間×15間以上の二面廂付建物1棟、作貫地区では桁行10～12間以上の片廂付建物数棟がある。8世紀段階の曹司の特徴として、桁行の長い廂付建物が多い傾向がうかがえる。これは職掌分化が進んでおらず、類似する職掌の曹司が合庁的な形で実務をおこなっていたことを示している可能性がある(図4)。

此治城は築地で囲った政庁、その外を方形に築地で囲った曹司域、その外の堅穴住居群を土塁で区画した三重郭の構成をなす。曹司域では、同規模の建物を北に東西棟2棟、その東と西に各3棟の南北棟建物を配置するコの字型が成立している。

9世紀になると、曹司域は建物棟数の増加、これと井戸や工房、堅穴住居との組み合わせを含めた官衙パターンが成立するなど、曹司域が一段と整備充実されてくる。多賀城では大畑・作貫・六月坂・金堀・五万崎地区など政庁を取り囲む独立小丘陵上に、職掌ごとに掘立柱建物を中心とした実務官衙が展開する。そのパターンとしては、

①天長年間に整備された大畑東官衙でみられるような片廂付建物を主屋として、数棟の切妻建物と井戸や鉄製品関係の堅穴工房で構成されるもの

②9世紀後半の大畑西官衙でみられるような6間×2間の切妻建物を中心として、これと同規模の建物各3棟を東西対称に配置し、井戸や堅穴が伴わないもの

③9世紀の作貫地区の官衙でみられるような二面廂付建物を中心に左右対称に2棟の切妻建物を対称に配置し、井戸や堅穴が伴わないもの

④9世紀の六月坂地区の官衙でみられるような東・西2棟の四面廂付建物を中心に地形にあわせた数棟の切妻

建物を配置し、これに堅穴が伴うもの

⑤五万崎地区の官衙にみられるような、切妻建物を中心に製鉄・製銅工房が伴い、これらを堀で区画するものがある。10世紀初頭に充実するなど様々である。張り床下に暗渠を有する堅穴は例外なく工房とみてよいが、他の要素で居住堅穴と工房堅穴を区別する視点が課題となる。

鎮守府胆沢城では東方官衙南、東方官衙北、府庁厨、西方官衙が政庁周囲に配置され、柱列堀で仕切られた院を形成している(図10)。すべての建物が政庁と方位を揃えており、廂付建物を中心に数棟の切妻建物で構成されるものが多い。特に、府庁厨では桁行が長く、間仕切の多い切妻建物をコの字形に配置し、中央に井戸を有する特徴がみえる。

徳丹城の曹司は方355.8m全体を使って濃密に展開する。政庁北東官衙、政庁北西官衙、政庁南西官衙があり、方位を政庁に合わせ、廂付建物を中心に院を構成するあり方は胆沢城と共通する。これに対して志波城では政庁東南前面に数棟の片廂付建物・小規模の切妻建物群、堅穴で構成される曹司がみられるが、政庁の東と西は極端に建物が少なく、徳丹城との違いは大きい。弘田柵跡、秋田城跡の曹司については調査成果を待ちたい。

方格地割 8世紀後葉になると多賀城南前面に方格地割が成立し、様々な変遷を経て10世紀中頃に終焉を迎える。地割内には数か所の国司館や城外の公的施設(市や駅家など)、会津郡主政益継の解文案が示すように郡関係の出張施設、製鉄や漆工房など直接多賀城を支えた行政的色彩の強い施設などが展開する。また、四境祭や万燈会など国府域の境を祭る遺構や遺物もみられ、視覚的にも国府域が設定できるようになった(図11・13)。

地割の基準は政庁から南に延びる南北大路とこれに交差する東西道路である。当初城内で幅員12m、9世紀に18m、城外18mから23mに拡張された南北大路は、その東側溝から170点に及ぶ郷里制段階の木簡が出土しており、創建期から存在していたことがわかる。外郭南門から南に5町まで延びて、東西大路と交差する。

幅員12mの東西大路は、8世紀後半の土器を含む土坑を埋めて作られており、建設時期は8世紀後葉頃とみられている。東西大路は外郭南辺築地と平行し、中軸線と西で7度北に振れるので、この二大路を基準とする幅員3mの小路で地割された個々の区画は不正方形をなす。概ね1町間隔を意識した地形にあわせた割付けになっている。

東西大路は南北大路との交差点から西1.3kmの東町浦地区まで西1～9道路を、東は東1～3道路までを検出している。したがって、国府域の東西範囲は1.6kmに及ぶ。南北は南2道路を南限とするので、外郭南門から7町=750mほどになる。地割内には砂押川が時折流路を変えて北か

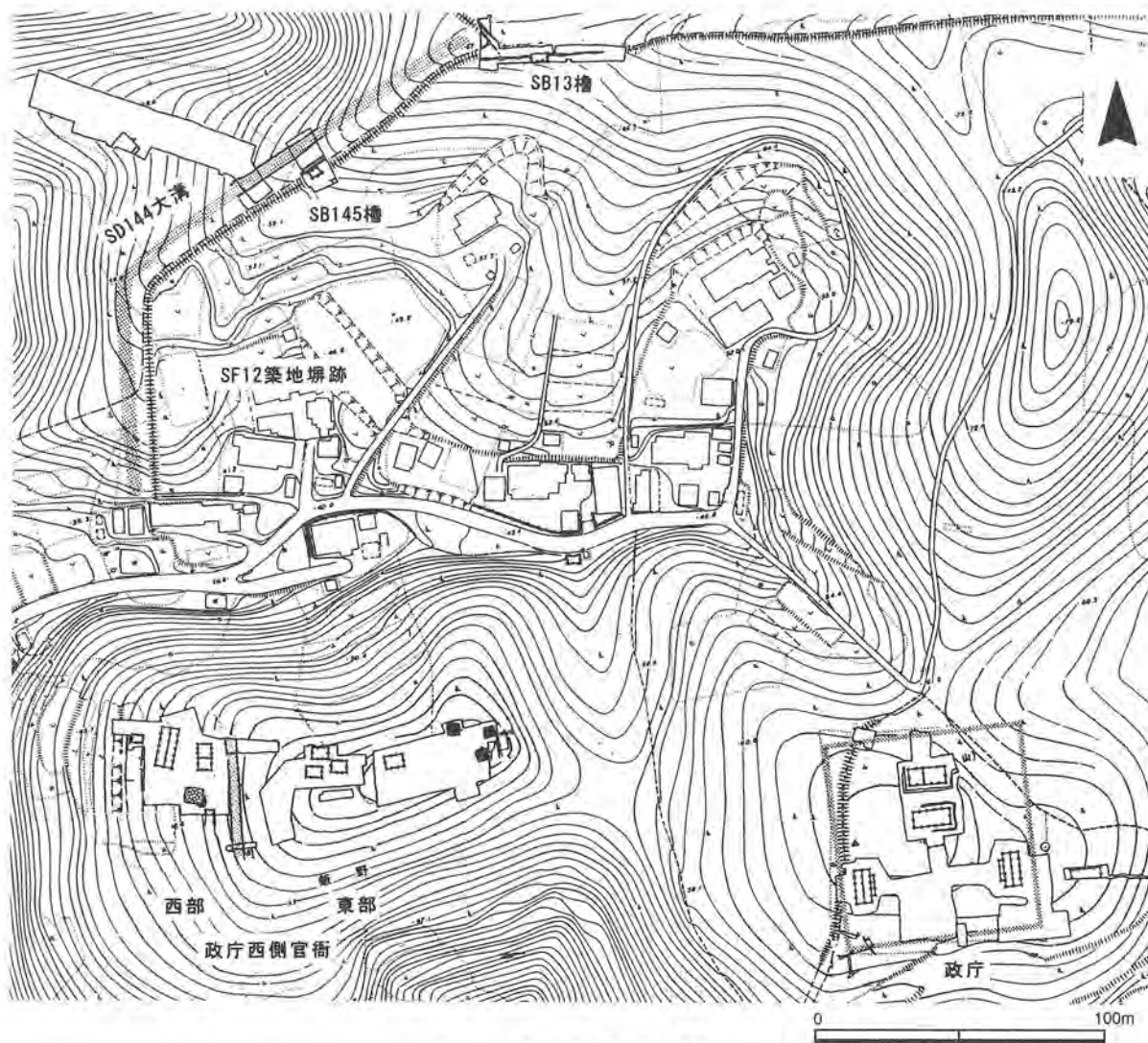


図5 桃生城北半部遺構全体図

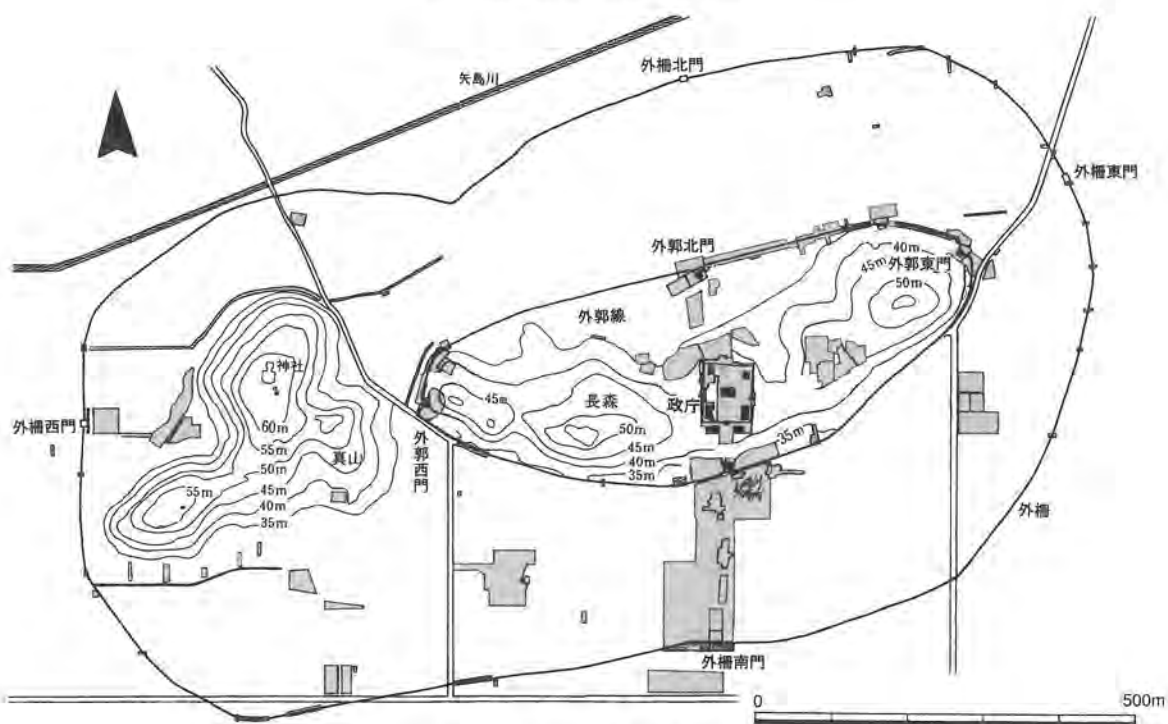


図6 弘田柵跡遺構全体図

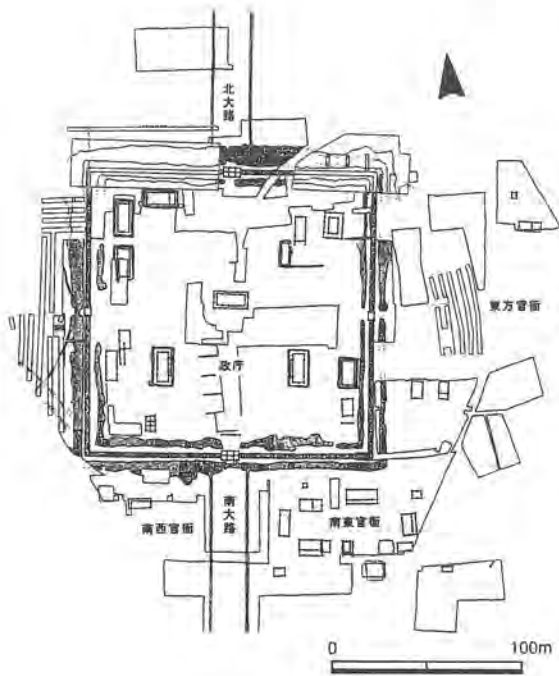


図7 志波城政庁と付属建物

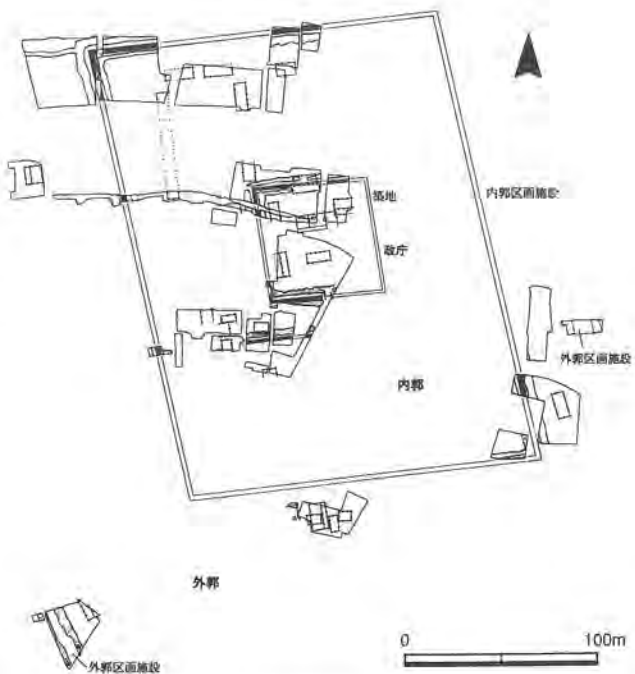


図8 伊治城政庁とその周辺

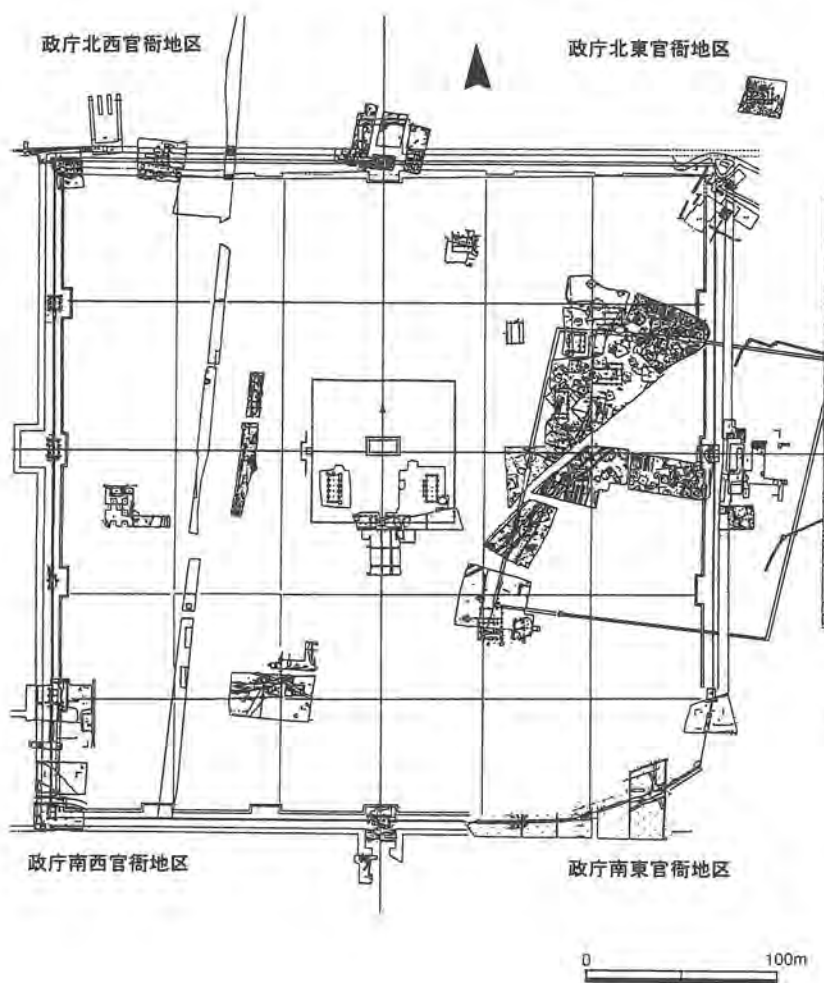


図9 徳丹城遺構全体図

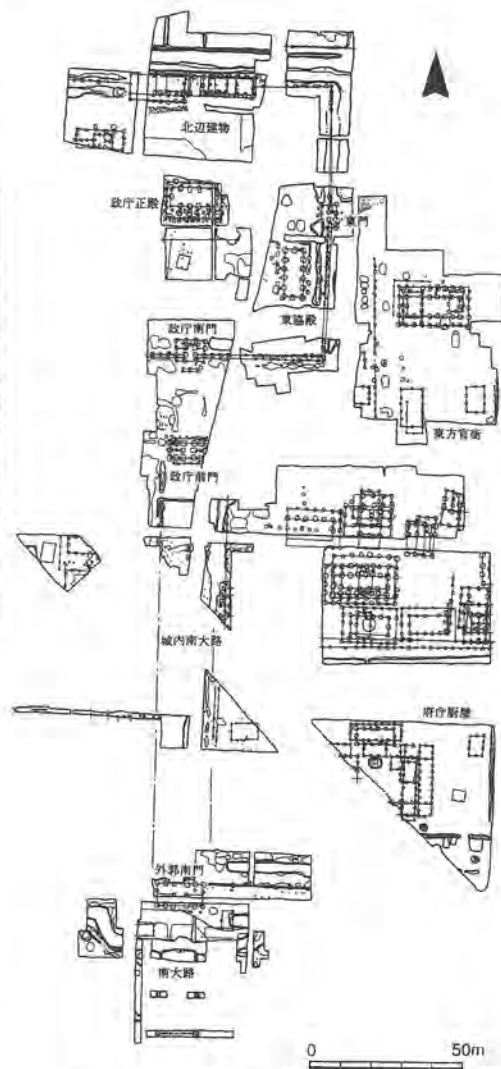


図10 胆沢城政庁と東方・西方官衙

ら南に流れており、南北道路に平行して多賀城へ引いた運河が随所にみられる。南北大路は胆沢城と志波城が建設される9世紀初頭に幅員23mに拡幅整備される。

東西大路にはA～I期の変遷がある。このうち、A期が8世紀後葉、C期が側溝から出土した弘仁11年付札木簡、F期の側溝に10世紀の30年代に降下した灰白色火山灰が堆積していること、最終のI期が10世紀後半の遺物に限定され終焉を迎えていることから推定できる。

方格地割は段階的に行われている(図11)。すなわち、8世紀後葉には部分的に地割がみられ、9世紀前半には東西大路の北と南に、9世紀後半段階で最も整備された形となる。

最近、県営圃場整備事業に伴う調査で、宮城県東山官衙遺跡(陸奥国賀美郡家)南前面の壇の越遺跡で、多賀城と同様の方式すなわち東西・南北道路で区画された方格地割の存在が判明している。その成立年代も8世紀後半とされ、多賀城よりも若干古い。

地割の基準は東山官衙遺跡の外郭南門から南に延びる道路を基準として1町=109m方眼の地割である。現在、南2～南7道路まで760m、西には西1～3、5、6道路まで650mが検出されている。低位段丘の南5区西5区、南6区西5区には東西61m×南北64mを材木列塀で囲み、主屋と雑舎、倉庫群からなる院がある。賀美郡家の前面に展開していることを重視すれば、「上野国交替実録帳」に記す一館、二館のような館の可能性が考えられる。また、9世紀の段階で、櫓の取り付け築地も西5南2付近から西3南6付近まで段丘に沿って確認されている。これについては、東山官衙が拡大したものか、地割内の特殊事情によるものかは今後の課題となる。

このほか、9世紀初めに築造した胆沢城、徳丹城、城輪柵跡は沖積平野に立地する特徴がある。城輪柵は400尺×6=720mで、多量の人形や人面墨書土器を出土する俵田遺跡や斗供・長押など多量の建築部材を出土した堂の前遺跡もこの400尺法眼上に設定されているという。400尺の地割単位は平安京条坊単位尺であることから、方格地割の施行をめざした立地選定が桓武期になされているとも考えられる。9世紀初頭で東北の城柵が大きく拡大整備されていることは確かである。(進藤秋輝)

〔注〕(1) 8世紀以降の国府政庁パターンについては、大宰府政庁をモデルとした西海道国府型、多賀城をモデルとする東北城柵型、桁行の長い脇殿を特徴とする内国型の3類型が指摘されている。また、その成立年代と起源については和銅元年の平城遷都を契機とし、太政官院下層の建物配置に祖形を求める説がある(阿部義平「国庁の類型について」『国立歴史民俗博物館研究報告』10、1986年)。

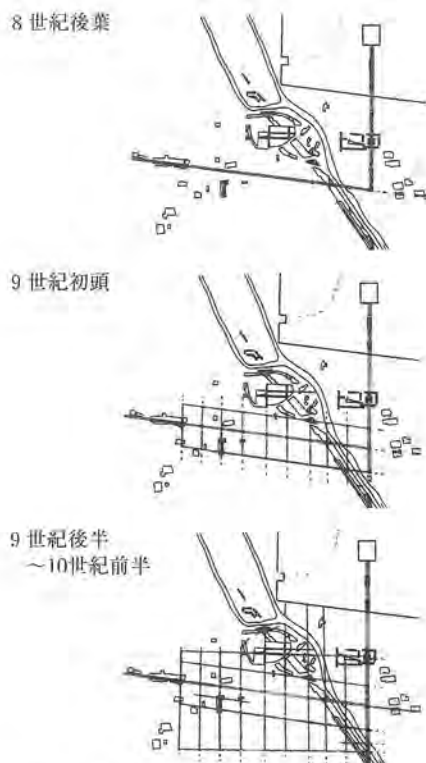


図11 多賀城南側の方格地割変遷図

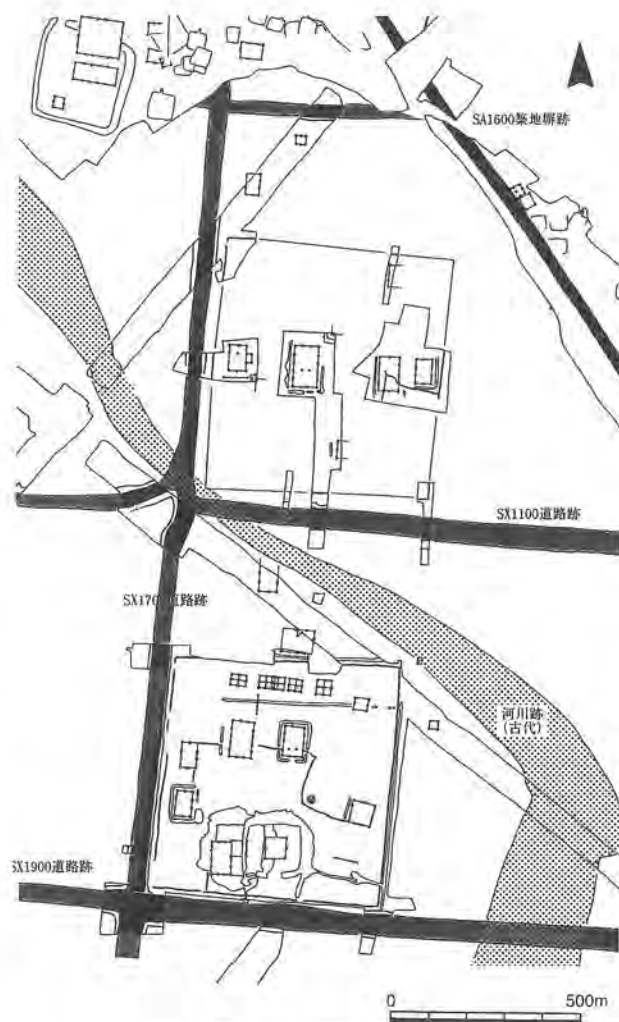


図12 宮城県壇の越遺跡の館



図13 多賀城と方格地割



図14 宮城県東山官衙遺跡と壇の越遺跡の方格地割

Ⅸ-2 山城・神籠石

分類・呼称 西日本の古代山城はこれまで朝鮮式山城と神籠石の2つに分類されてきたが、近年の調査成果を受けて「古代山城」として一括して論じられるようになりつつある。『日本書紀』『続日本紀』などに築城・修築記事のみえる山城（いわゆる朝鮮式山城）は12城を数え、その築城契機・築城主体については比較的明らかであるが、遺跡地や遺構が未判明の城も多い。文献に記載のない山城は、最近、福岡県で新たに2城（宮地岳城、唐原城）が発見され全部で16城となったが、その年代観と築城主体をめぐって論争が続いている。文献未記載の山城について「神籠石系（式・型）山城」の呼称が使用されているが「神籠石」とは本来列石ではなく「岩座」を指した名称であり、現在では学史的に使われているにすぎない。文献に記載の有る無しによる分類も考古学的分類としては実態にそぐわない。神籠石系山城といってもいくつかの類型に分けられるし、朝鮮式山城自体多様である。選地・外郭構造などの分析による類型化と編年がこれからの有効な研究方法と言える。

分布 日本の古代山城は北部九州～瀬戸内～畿内までベルト状に分布し（図1）、特に北部九州には14城が濃密に分布する。逆に王都である畿内には高安城1城のみで、大陸に近い日本海側にも分布をみない。大きくみると畿内を守る縦深防御体系（侵攻ルートに沿う防衛シフト）と捉えられるが、朝鮮諸国のような王都を守る衛星防御体系（環状の防衛網）を欠いている。最前線の前縁防御体系（国境防衛線）たるべき北部九州の山城配置は、玄界灘沿岸に薄く有明海方面に厚い、大宰府を中心とした同心円状の配置となっている（図3）。山城群の分布は一見大陸からの防衛ラインを為しているが、細部において疑問点も多い。その分布範囲は6世紀後半～7世紀代の倭王権の地域支配施策地と重なり合うことから、その築城目的が大陸からの防衛を契機（663年白村江敗戦）としながらも、西日本主要部の地域支配に重点を置いたものであったことがうかがえる。

選地（占地） 朝鮮半島の山城では選地形態からみた「包谷式」と「テメ式（山頂式・鉢巻式）」の分類が広く使われているが、両者の中間的な山城も多く、実際に分類するとなると単純には分けられない。また包谷式でも大規模なものを「連峰式」と呼ぶこともある。高句麗地域には大型の包谷式山城が多いが、百済・伽耶など半島南部では大部分が周長1km以下の中小規模のテメ式山城である。日本の古代山城は「百済式」とされているが、山城の規模や形態は大型の包谷式ばかりで、むしろ高句麗山城を指向している。周長（全周規模）と城壁最低点（水門部）までの比

高相関図（図2）からは、日本の古代山城の選地に大きく二つのタイプがあることがわかる。

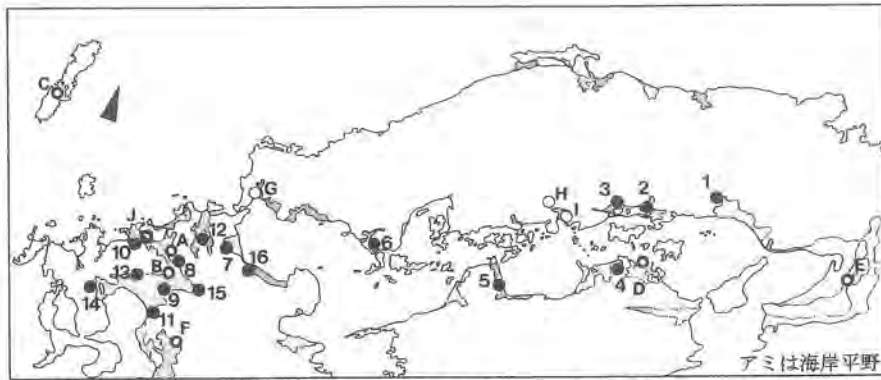
〔選地1類（峻山城類）〕 城壁最低点比高が30m以上で、周長が2～6kmに及ぶ。

〔選地2類（緩山城類）〕 城壁最低点は平地近くまで下り、周長は3kmを超えずほぼ2km前後に集中する。

1類の多くは独立峰に選地し、縄張として「複郭プラン」をとっている場合が多い。大野城や基肆城が水城のような遮断城を併設し、大宰府を囲む一種の羅城を形成していることはよく知られている。讃岐城山城の低土塁の外郭、鬼城山城南東麓の小水城状の土塁遺構、屋嶋城の浦生石塁のように具体的な遮断線を持たなくても、周辺地形（湾、丘陵、段丘）を利用して外城ラインとし、城内最低点を背後の谷盆地側に開く状況は1類の多くの山城で指摘でき、防御性を考慮した縄張と評価できる。これに対し2類は城壁最低点である水門部が平地まで下り、平野側に正面を向けて縄張りされている。独立峰でなく主山塊を背後に持つ支峰に選地し、城域背面側には一部城壁を設けていない場合もある。谷を多く取り込んでいる割には城内は傾斜地ばかりで平坦地に乏しい。1類に比して防御性は著しく劣り、特殊・様式化された選地と言える。1類は北部九州～瀬戸内沿岸に広く展開するのに対し、2類は北部九州、中でも有明海沿岸を中心に集中分布している。

土築・石築 日本の古代山城の外郭線は基本的に版築土塁が多く、全外郭線を石築で構築しているのは金田城、屋嶋城、讃岐城山城内郭など少数派である。朝鮮半島では石塁が主流であるのと対照的である。しかし稜線上の城壁線が土築であっても谷を渡る部分は石塁となり、谷水を排水するために石塁中に暗渠状の水門（水口）を設けている場合もある。水門石塁の上に土塁を乗せるタイプが比較的多い。石塁の石積みには野面積みや若干整形加工した割石積みと切石積みがあり（図6）、横に目地が通る布積みあるいは布築崩しと呼ばれる技法がとられている。外壁面角度は60～80度、切石積みでは90度に近く、土塁外壁もほぼ同じ角度に復元される。切石積み石塁や水門部を土塁と列石だけで構築している事例（鹿毛馬城、帯隈山城、杷木城、唐原城）は北部九州に限られる。石塁内部の充填石材は普通外壁材より若干小さい程度だが、切石積み石塁ではグリ石が用いられている場合（おつぼ山城、女山城）がある。鬼城山城では石塁内部が版築の箇所も確認されている。

夾築・内托 外郭線の形態については「夾築（両壁式）」と「内托（外壁式）」の2種がある。朝鮮半島の山城は山地稜線上に外郭線を設けているため、斜面を利用し城外側に城壁を設ける内托形となるが、実際は城内側にも低い壁を造る半夾築形が一般的である。これに対し日本の古代山



- 1 播磨城山城 7 御所ヶ谷城 13 帯隈山城 A 大野城 G 長門国の城
 2 大廻小廻山城 8 宮地岳城 14 おつぼ山城 B 基肆城 H 常城
 3 鬼城山城 9 高良山城 15 杷木城 C 金田城 I 茨城
 4 讃岐城山城 10 雷山城 16 唐原城 D 屋嶋城 J 怡土城
 5 永納山城 11 女山城 E 高安城
 6 石城山城 12 鹿毛馬城 F 鞠智城

図1 古代山城分布図

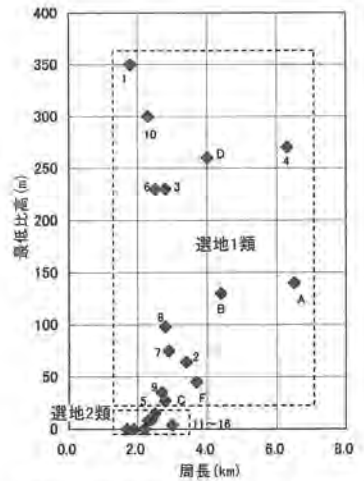


図2 古代山城の周長比高相関図

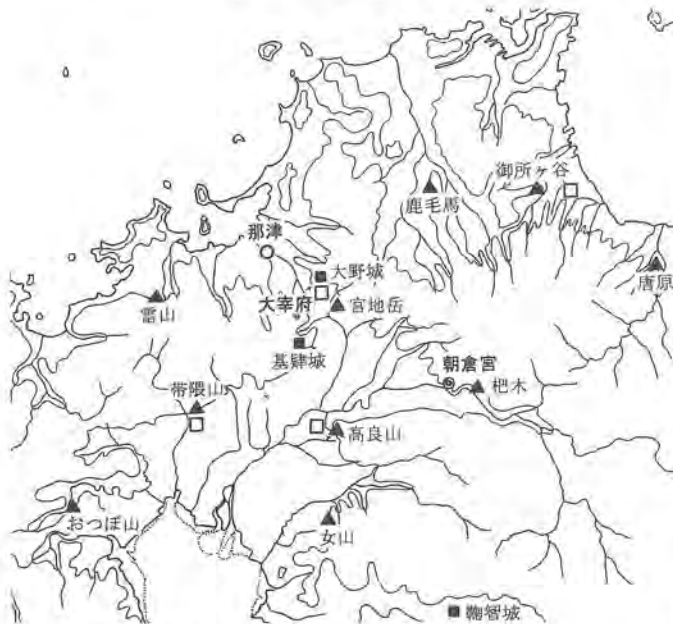


図3 北部九州の古代山城分布図

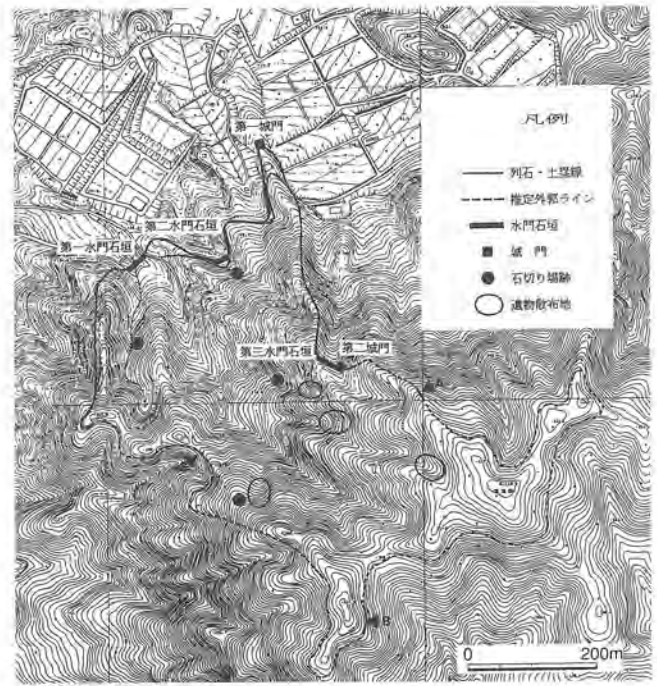


図4 福岡県宮地岳城遺構平面図

表1 古代山城構造比較一覧

山城名	所在地	周長 (km)	標高 (m)	最低比高 (m)	外郭線構造				列石・石材							城門		類型			
					土塼・ 石塼	塼形 懸	折・ 曲	版築	水門	列石	石材加工	石材供給	被覆・ 露出	置き方	段差調整 面	列石前柱 (有無・ 間隔m)	城門		門礎		
1	播磨城山	兵庫県龍野市・新宮町	1.8	458	350	石?	内托	折?		石塼	野面	現地	被覆	寝	×	×	○?	凹型	選地1外郭1-b		
2	大廻小廻	岡山県岡山市・瀬戸町	3.4	198	64	土	内托	折?	◎	石塼	◎	割石	現地	被覆	寝	×		凹型	選地1外郭1-b		
3	鬼城山	岡山県総社市	2.8	403	230	土・石	夾築	折	◎	石塼	◎	割石	現地	露出?	寝	×	◎3.0	◎	凹○型	選地1外郭1-a	
4	讃岐城山	香川県坂出市・飯山町	6.3	462	270	石・土	内托	折		石塼	○	野面	現地	被覆	寝	×		◎	凹型	選地1外郭1-b	
5	永納山	愛媛県東予市	2.5	128	15	土	内托	折	◎	◎	◎	割石	現地	被覆	寝	×	×		◎	選地1外郭1-b	
6	石城山	山口県大和町・田布施町	2.5	350	230	土	内托	折	◎	石塼	◎	割石	現地	被覆	横	○	◎2.19	◎	凹型	選地1外郭1-c	
7	御所ヶ谷	福岡県行橋市・勝山町・厚川町	2.9	247	75	土	夾築	折?		◎石塼	◎	切石	現地	被覆	横	◎	◎1.8	◎		選地1外郭1-a	
8	宮地岳	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	土	内托	折	◎?	◎石塼	◎	切石	現地	露出?	横	×		◎?		選地1外郭1-c	
9	高良山	福岡県久留米市	2.7	252	35	土	内托	曲	○?	◎石塼?	◎	切石	現地?	露出	横	×				選地1外郭2	
10	雷山	福岡県前原市	2.3	483	300	土塼なし	(内托)	折		◎石塼	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×			選地1外郭2	
11	女山	福岡県瀬高町	3.0	202	4	土	内托	曲	◎	◎石塼	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0			選地2外郭2	
12	鹿毛馬	福岡県雁田町	2.2	70	0	土	内托	曲	◎	◎土塼	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0			選地2外郭2	
13	帯隈山	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	土	内托	曲	◎	◎土塼?	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0	◎		選地2外郭2	
14	おつぼ山	佐賀県武雄市	1.9	66	0	土	内托	曲	◎	◎低石塼	◎	切石	搬入	露出	横	◎	◎3.0	◎		選地2外郭2	
15	杷木	福岡県杷木町	2.3	130	8	土塼なし	(内托)	曲	○?	◎土塼?	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×			選地2外郭2	
16	唐原	福岡県大平村	1.7	73	0	土塼なし	(内托)	曲?		◎土塼	◎	切石	搬入	露出	横	◎	×			選地2外郭2	
A	大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	土・石	夾築	折?	◎	◎石塼	○	野面	現地	被覆?	寝	×	◎1.6	◎	○型	選地1外郭1-a	
B	基肆城	佐賀県基山町	4.4	416	130	土	夾築	折?	○?	◎石塼		野面	現地					◎	○型	選地1外郭1-a	
C	金田城	長崎県美津島町	2.8	276	27	石	夾築	折?		◎石塼	○?	野面	現地						◎	○型	選地1外郭1-a
D	屋嶋城	香川県高松市	4.0	292	260	石	内托	折?				野面	現地					◎		選地1外郭1-b	
E	高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町		488		土?	内托?													選地1外郭1-b	
F	鞠智城	熊本県鹿野町・菊池市	3.7	169	45	土	夾築?		○?		○	野面	現地	被覆?	寝	×		◎	○型	選地1外郭1-b	

城では城内側を山の斜面に持たせ掛けるような土段（壇）状の内托土塁（図5-②）が圧倒的に多く、半夾築（図5-①③）は大野城や鬼城山城などにしかみられない。半夾築は城壁高も高く（3～5m）対人遮断性に優れ、塁の背後には城内通路（車路）が付設されている。土段状土塁の城壁高は1.5～3mと低く、城壁天部が通路を兼ねているらしい。本体城壁の前後にも土段を形成して「多段式」の外郭ラインとしている場合が多い。

折れ構造 外郭線が直線を一単位として走行し接続部に「折れ構造」を持つ山城が瀬戸内の諸城と北部九州の一部の山城（御所ヶ谷城、宮地岳城、雷山城）にみられる。おつぼ山城など有明海沿岸部の山城は曲線走行を基本としており、外郭線走行に大きく東西2つのタイプが存在している。大野城など文献に記載のある山城や朝鮮半島の山城については、一部折れではないかと指摘されている箇所もあるが未確認であり、将来の発掘・精査が必要である。

列石 土塁構造については、北部九州の神籠石系山城の土塁断面調査が先行し、朝鮮式山城や瀬戸内の山城では最近まで調査事例に恵まれなかった。そのため神籠石系山城＝列石あり、朝鮮式山城＝列石なし、といったイメージが定着してしまった。韓国でも土塁基底部に列石（基壇石）を持つ山城が検出され始めたが、割石（板石）を1～2段積みとしており、北部九州のような切石列石はみられない。最近の調査で大野城や讃岐城山城でも土塁基底部の列石が確認されるに及んで、分類指標としては列石の有無よりも列石の「被覆（非露出）」と「露出」が注目されてくる（図7）。列石の被覆（いわゆる埋め殺し）は石城山城、大廻小廻山城、御所ヶ谷城で検出され疑問の余地はなく、韓国の蛇山城でも外皮版築として報告されている。これまで列石の機能は単に土留め用とされていたが、雨水による土塁基底部の浸食保護も重要な役割であったと考えられてきている。土塁背面側に排水溝が検出されている事例（おつぼ山城、大廻小廻山城、鬼城山城）や鬼城山城の基底部列石前面と土塁背面に付設された敷石（図5-③）も雨水対策と考えられている。土塁の保全からみれば列石を露出させるかどうかはあまり問題ではなく、露出については「見せる」効果が想定される。列石の被覆・露出の相違は外郭線走行や石材供給の方法、石材形状、置き方とも概略一致している（表1）。

〔外郭1類〕 折れ構造－列石の被覆－現地調達（選地する山塊周辺で採石）－割石使用（一部切石使用）－寝かせ置き（高さ＜奥行き）

〔外郭2類〕 曲線構造－列石の露出－外部からの搬入（城外の他山塊に石切場を設け搬入）－切石使用－横置き（高さ＞奥行き）－列石間密着－段差調整面加工

外郭2類は選地2類と一致し、この山城群が選地だけで

なく外郭構造の面でも様式化されていることがわかる。段差調整面加工（列石上縁線を揃えるし字状の切りかき加工）も2類に特徴的にみられる。外部からの石材搬入については、数kmも遠隔地から搬入している事例もあり、安定供給を図るためとしても石材運搬そのものが目的化している感が強い。外郭1類も選地1類とほぼ一致するが、断面形態では2～3つに細分できる（a半夾築、b土段－低、c土段－高）。最近確認された宮地岳城は列石基礎に地覆状の石材を前方へ15～18cm突出させて並べており（図8-③）、国内では鬼城山城の角楼基礎があるだけで、他に類例をみない（韓国では統一新羅期山城に類例あり）。宮地岳城は選地面では2類、構造面では1類に近い特徴を持っており、両者の編年序列をつなぐ位置にある。さらに築造場所も大宰府羅城を補完する選地であり、今後の調査が注目される。

列石前面柱 列石前面の柱列に関しては、おつぼ山城の調査時に「柵列説」が出されたが、その後「版築工事の堰板支柱説」が支持されるようになった。最近の調査では土塁内部からも柱列が検出される事例（おつぼ山城、鹿毛馬城、御所ヶ谷城、鬼城山城）（図5-①③）も増加しており、土塁構築前に立てられ埋め殺しにされている。また版築技法で構築されていても列石前面柱を持たない土塁（大廻小廻山城・永納山城）もあり、雷山城や杷木城、唐原城のように列石のみ配し上部の土塁を築いていない山城でも前面柱は検出されていない。大野城や鬼城山城の前面柱は版築工事の完成後抜き取られており、柱穴も深くなく掘方もない仮設的なものだが、北部九州の神籠石系山城の前面柱は抜き取られた痕跡がなく、掘方や柱と列石間に倒れ防止用の添石を伴っている（図7-②）。おつぼ山城や鹿毛馬城では柱根や板材・炭化材が検出されており、堰板支柱としての使用後、土塁上縁に女牆などを設けていた可能性がある。土塁内外の柱は対となり柱列間隔は1.6m（大野城）、1.8m（御所ヶ谷城）など短いものもあるが3m間隔の事例が多い。前後の柱を横木で接続して版築が行われたと考えられるが、前面柱のない事例は版築工事の多様性（堰板保持の方法）を示している。韓国の山城でも列石に伴う柱列（永定柱）が検出されているが、石列間に立柱し、土塁に半ばめり込んだ状態（寄柱状）で設けられている（図8-①）。韓国では永定柱間距離が三国時代には1.2～1.8m→統一新羅時代以降3m以上に長くなっていくと考えられている。また韓国では版築土層の違いから柱を境に工区が想定されているが、日本でも最近検出事例（鬼城山城、水城）が出てきている。

城門 山城の諸施設としては城壁本体（体城）に伴う城門、雉城、甕城などと城内の建築物（倉庫、兵舎、管理棟、望楼など）や貯水池・井戸、石弾の集積などが考えられる。

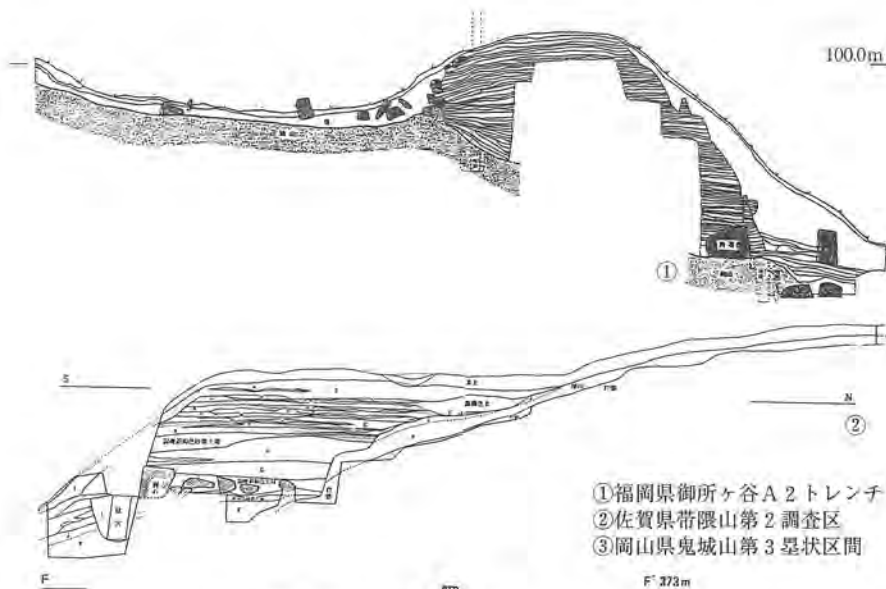
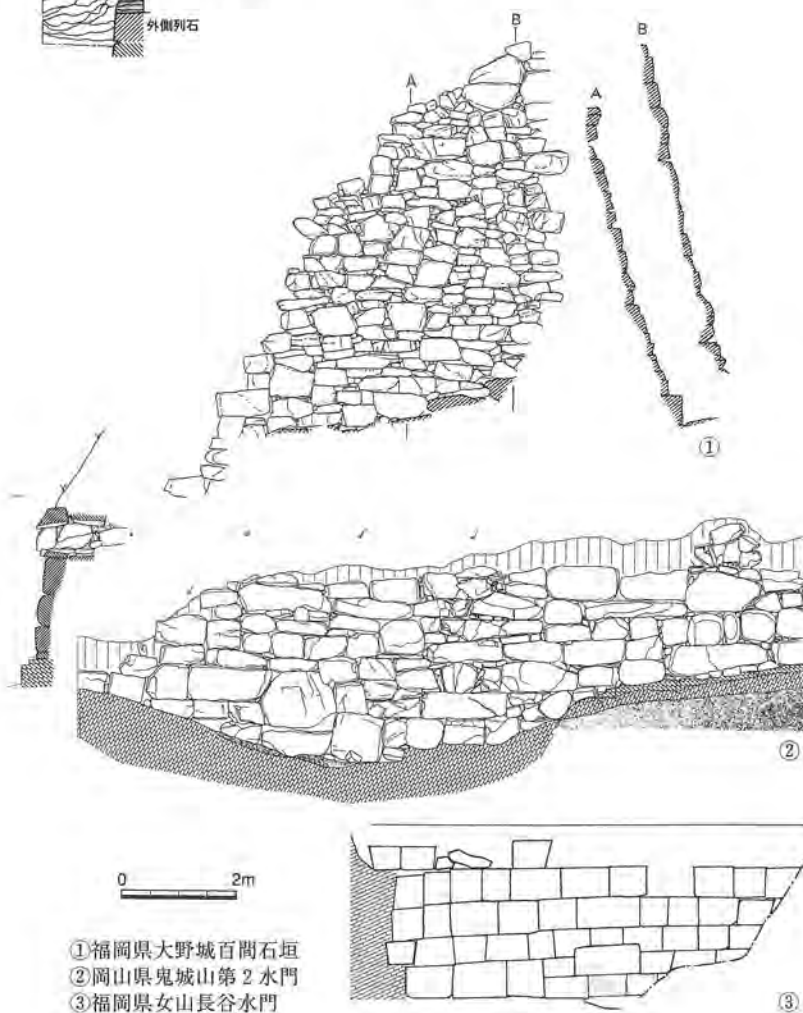
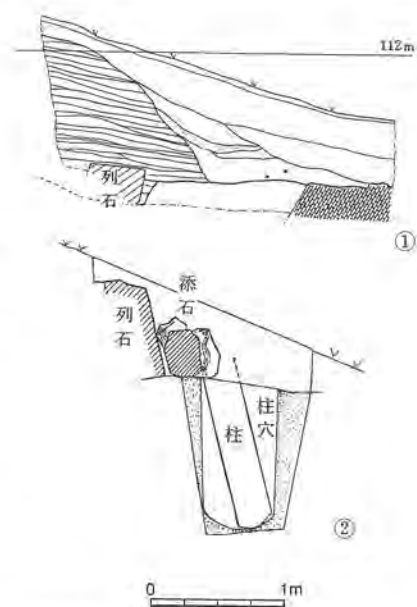


図5 土層断面図

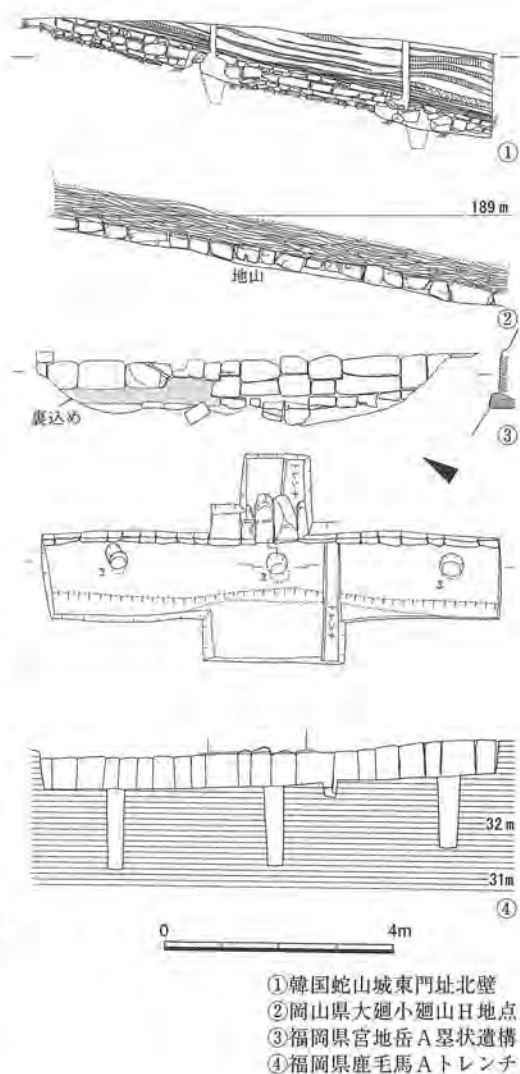


- ①福岡県大野城百間石垣
- ②岡山県鬼城山第2水門
- ③福岡県女山長谷水門



- ①岡山県大廻小廻山L地点第4・5トレンチ
(列石被覆)
- ②佐賀県帯隈山第4調査区
(列石露出)

図7 列石前面部の状況



- ①韓国蛇山城東門址北壁
- ②岡山県大廻小廻山H地点
- ③福岡県官地岳A土層遺構
- ④福岡県鹿毛馬Aトレンチ

最近調査例が増加しているのは城門で、16例（大野城、金田城、鞠智城、おつぼ山城、帯隈山城、御所ヶ谷城、石城山城、鬼城山城、屋嶋城）を数える。城門は建て替えや閉鎖など時期的変化を追える遺構として注目され、建築構造の比較検討によって築城主体や技術系譜など多様な情報を得られる可能性を持つ。城門には「平門式」と「懸門式（門入口に段差を設ける）」があり、朝鮮半島での調査事例には懸門式が比較的多い。日本では平門式が一般的だが、鬼城山城や屋嶋城は懸門式と推定されている。鬼城山城や金田城で検出された門道床面の石敷きも半島北方に系譜がある。また古代山城の城門には門礎石（唐居敷）の残る事例が多く、円形や方形の掘立柱用の削り方を持つものと礎石建てのものがある。瀬戸内の諸城（鬼城山城、石城山城、播磨城山城）には共通して方形削り方を持つ「コ字型唐居敷」がみられ、様式・寸法が酷似し同一の築城主体や年代を想定させる。

城門（虎口）防御 城門の形態自体は単純に開口する形で、甕城や雉城のような付帯施設が設けられている事例はほとんどない。ただし選地1類の山城では城外からの進入経路を山城側に有利となるよう、城門位置を尾根筋から若干脇に置いて進入路をクランクさせ横矢をかけたり、谷部では城壁を前方へ張り出して左右から俯瞰・挟撃できるよう縄張している。門を入った場所に遮蔽物（塀・岩）を置く事例もある。逆に選地2類の山城ではこのような防御上の配慮はほとんどみられない。

城内施設 大野城などでは郭内に礎石倉庫建物群が40～60棟確認されているが、他の山城では建物の検出事例は非常に少ない。鬼城山城では城内全域を対象とするトレンチ調査が行われ、倉庫建物、兵舎、鍛冶工房など機能別の配置が判明しつつある。大野城などの多数の倉庫群も築城当初からのものではなく8世紀以降増改築を重ねた結果とみられている。貯水池は水門背面と並んで遺物が集積する位置にあり木製品などの遺存率も高いと予想されている。

出土遺物 大半の城では土器の表採例もほとんどなく、発掘調査でも出土遺物は極めて少ない。出土状態も版築土塁中や建物基壇・柱穴からではないため、城に伴うものとしても存続期間の一時点を示すにすぎない。坏蓋・坏身、長頸壺、平瓶など出土・表採須恵器の年代は7世紀中葉～8世紀前半に比定されるものが多い（飛鳥Ⅲ～平城宮Ⅱ期）。甕破片は出土点数が多いが年代推定は難しい。遺構の切り合い関係から推定される年代は、帯隈山の陶棺破壊、女山城・唐原城郭内の群集墳、唐原城水門下層遺物などの事例から、6世紀末以前には遡れない。比較的出土遺物の多い鬼城山城の場合、城が機能していた年代は7世紀中葉～8世紀前半、特に7世紀後半（末葉）～8世紀初頭に大きなピークがあるとみられており、築城記録のある城とほぼ同

時期に併存していたことになる。僅かな出土遺物の上限年代＝初築年代としたり、逆に城の存続の下限年代とするのは資料操作の限界を越えており、現状では大野城などとの先後関係を判断することは難しいが、多くの山城が8世紀以降使用継続されなかったことを遺物量は示している。

類型化と編年 文献に記載のない山城の歴史的な性格、特にその築造年代については諸説あるが、最近では7世紀代に収斂しつつある。7世紀代といってもその築城を大野城（665年）以前とするか以後とするかによって、「先行説（7世紀前半）」と「後出説（7世紀後半～8世紀初頭）」に分けられる。先行説をとる研究者は多いが、特に明確な根拠があるわけではなく、文献記録のないことが大野城以前とする最大の理由となっている。先行説も後出説も類型化に関しては大差なく、①大野城などの朝鮮式山城（選地1類・外郭1類a・b）、②瀬戸内の神籠石系山城（選地1類・外郭1類a・b・c）、③北部九州の神籠石系山城（選地2類・外郭2類）の3つの類型を想定する研究者は多い。編年序列の逆転は北部九州の神籠石系諸城の編年の位置付けが論点となっている。「齊明天皇西下時築城説」の提起以降、先行説の年代は660年頃まで引き下げられ、白村江戦後の神籠石系諸城の未完成・放棄、一部修築後の朝鮮式山城との併存を認めようとする傾向にあるが、選地、外郭構造の異なる山城が同時、同契機に造られたとは考えにくい。先行説は全ての城を対外防衛用とし、異なる類型の存在を地域性とみているが、後出説では時期差や機能差（対外防衛→律令制化・地域支配）として段階的な築造課程を推定しており、編年序列は軍事性の低下していく方向で想定されている。

百済・新羅地域の山城では三国統一後、より高い山岳へ立地するものと城壁が山の斜面から平地へ降りてくる二つの類型が成立する。高い山岳へ立地する山城は純軍事的城郭で三国時代よりさらに大型化していく。また平地へ降りてくる平山城（土城）は高麗時代の古邑城につながる城郭で、行政的機能を担当したとみられている。軍事→行政への機能の違いは城門の位置や形式にも反映しており、防御に有利→出入の便利さ、懸門式→平門式へと推移する。また韓国では列石の出現時期について早くても百濟末、一般化するのは統一新羅時代以降として編年が調整されつつある。このような朝鮮城郭史の編年観は無理なく後出説と対比することができる。（向井一雄）

〔参考文献〕 亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、1995年。村上幸雄・乗岡実『吉備考古ライブラリー2 鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版、1999年。小田富士雄「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』44、2000年。向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝瀆』9・10、2001年。徐程錫『百済の城郭－熊津・泗沘時代を中心に』学研文化社（韓国）、2002年。